

プログラム・ノート

PROGRAM NOTES

解説・柴田 克彦 Katsuhiko Shibata

藤 岡幸夫の首席客演指揮者となって2度目の定期は、“隠れた名作”が中心。まずは自身ゆかりの深いイギリス物からヴォーン・ウィリアムズの佳品が披露される。この曲、ポピュラリティは低いが、イギリス音楽のコア層から高い支持を集める美しい音楽だ。おつぎのプロコフィエフのピアノ協奏曲第3番は20世紀ロシアを代表する名作。俊英・松田華音の本場仕込みのソロと、藤岡&シティ・フィルの意欲的な表現が融合した、生気漲る快演が期待される。そして後半全体を占める伊福部昭の「サロメ」は、今世紀初のプロ・オケによる生演奏という激レアな演目。たつての希望が叶った藤岡の熱いタクトとともに、新たな歴史を体験することになる。

レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ(1872～1958)
**「富める人とラザロ」の
 5つのヴァリエーション**

ヴォーン・ウィリアムズは、近代イギリスを代表する国民主義的な作曲家。あらゆる分野に多数の作品を残し、中でも採集や研究に勤しんだイギリス民謡に基づく平明な音楽で知

られている。

弦楽とハープのために書かれた本作もその一例。1939年のニューヨーク万博のために作曲され、当地で初演された。「富める人とラザロ」自体は、「貧乏なラザロは天国で優遇され、金持ちは地獄で責め苦を受ける」といった新約聖書にあるお話。本作は、これを題材にしたイギリス民謡と、国内各地に伝わる5種のヴァリエーション(変種、異版)を、変奏曲風に繋いだ音楽である。

曲は、正調の旋律が主題のごとく提示され、テンポや拍子を違えた5つの異版が切れ目なく続く形。ソロや各パートの分割もまじえた弦楽群が精妙な綾をなし、ハープが絶妙な色合いを添える。

■楽器編成
 弦5部、ハープ

セルгей・プロコフィエフ(1891～1953)
**ピアノ協奏曲第3番 ハ長調
 作品26**

旧ソ連の大家プロコフィエフは、ピアノ協奏曲を5つ残した。本作はそれらのみならず、20世紀の同分野を代表する1曲。創作の発端は音楽院在学中の1913年に遡るが、1918年

にロシア革命の混乱を避けてアメリカへ亡命後、本格的に着手され、ピアニストとして欧米を往復する中、1921年にフランスで完成された。同年シカゴで自身のピアノにより初演されたもののアメリカでの反響は乏しく、やがて移るパリなどヨーロッパ各地での演奏で評価を高めていった。

当時、前衛的な作風を指向していたプロコフィエフだが、本作は新古典主義に寄った平易で明快な音楽。古典的な3楽章構成の中で、ダイナミックな躍動感、清新なリリズム、ロシア風の旋律美、そしてモダンな感覚を併せ持った音楽が展開される。また華麗なピアノ独奏のみならず、オーケストラも多彩な役割を果たす。

第1楽章……アンダンテ—アレグロ。クラリネットが歌う序奏の主題で開始。すぐにテンポを速めて、細かく烈しい第1主題と若干ユーモラスな第2主題が登場し、穏やか楽想もまじえながら、精力的な進行を遂げる。

第2楽章……アンダンティーノ。主題と5つの変奏とコーダ。ひなびた主題に、野性的、神秘的な場面などが移ろう変化に富んだ変奏が続く。

第3楽章……アレグロ・マ・ノン・トロppo。「越後獅子」に似ていることで知られる主要主題の部分に、物寂しい部分が挟まれ、躍動的な終結に至る。

■楽器編成

独奏ピアノ、フルート2(ピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タンバリン、カステネット、弦5部

伊福部昭(1914~2006)

舞踊曲「サロメ」

「日本狂詩曲」「交響譚詩」といった民族的な名作や、「ゴジラ」などの映画音楽を多数残し、教育者としても実績をあげた伊福部昭の音楽は、今も熱い支持を集めている。だが本作は演奏機会が稀な1曲。1948年貝谷八百子バレエ団のために書かれた舞踊音楽を、1986年コンサート用に大幅改訂した作品で、1987年5月、山田一雄指揮／新星日本交響楽団によって初演された。

改訂版の経緯は、バレエ公演後消失したスコアが1984年頃ある楽団の倉庫から発見されたことに始まる。折しも新星日響の第100回定期演奏会のための新作を委嘱された伊福部は、それにあてるべく改訂に着手。3管編成の新たなオーケストレーションを施したほか、ダンサーの体力的な制約があった箇所を「満足のゆく分量にまで拡大」(伊福部)し、静かなラストも激烈な形に変更した。

物語は、R.シュトラウスの歌劇と同じくオス

カー・ワイルドの戯曲に拠っている。すなわち、ヘロデ王が妃ヘロディアスの連れ子サロメによこしな心を抱くも、サロメは幽閉されている預言者ヨカナーンを求め、踊りの褒美にもらった彼の首を愛でる狂行の果てに殺される……といったもの。ただし本作は、バレエの舞台が中近東に移されていたため、伊福部らしい野趣の中にもエキゾティックなテイストが横溢した音楽となっている。

* * *

曲は、悲劇を暗示した前奏曲で始まる(ティンパニの3連打はその後も重要な働きをする)。続いてヘロデ王の宮殿内(イングリッシュ・ホルンのソロ)、サロメの召使、ユダヤ人、ナザレ人などが描かれ、王の誕生日を祝って侍女たちが踊る(とりわけエキゾティックな音楽)。

宴の間が騒がしくなり、ヘロデ王と王妃ヘロディアス、廷臣たちが登場(金管のファンファール風の部分)。ヘロデは、水槽内に幽閉している預言者ヨカナーンの扱い(兄の妻ヘロディアスと結婚したヘロデを非難するヨカナーンの声がバス・クラリネットで奏される)と、姪サロメへの想いに苦悩している(弱音器付きのトランペットが悩める心を示す)。

サロメが登場(オーボエのソロ)。ヘロデ、ヘロディアスとの対話や駆け引きが続き、それが激しさを増す。やがてヘロデはサロメに「お前が踊れば何でも願いを聞く」と言う。

そこでサロメは「7つのヴェールの踊り」を

舞う(アルト・フルートのソロに始まる部分。不気味な音楽から伊福部お得意の原始的な音楽となり、ワルツを挟んで激しく畳み込む)。

踊りが終わると、首切り役人が水槽内に降りて、ヨカナーンの首を求めるサロメの願いを実行。彼女に首を差し出す(ファゴット群の下行に始まり、ヨカナーンの断末魔を表すバス・クラリネットのソロを経て、アレグロに至る部分)。サロメは首を抱きながら陶醉し、狂乱状態に陥る(緩急が激変する長めの部分)。そしてヘロデが「その女を殺せ」と命じ、兵士たちが盾で押し殺す(金管の咆哮が続き、一気に終結)。

■楽器編成

フルート2、ピッコロ、アルト・フルート、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラ・ファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タム・タム、トム・トム、ティンパレス、コンガ、ハープ、弦5部

柴田 克彦(しばた かつひこ)

音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。「ぶらあぼ」「モーストリー・クラシック」等の雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレットへの寄稿、プログラム等の編集業務、講演や講座など、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。